

## 【古代①】

ローマの街は、伝承によれば、前 8 世紀にトロイア王家の末裔が暗殺を避けアニオ川に流され、やがて漂着した地点に誕生し、王子ロムルスの名に因んでローマと呼ばれた。その地は、ティベリス川が蛇行する川中島（ティベリーナ島）付近とされる。上流からの堆積物は、川中島を形作ると同時に、下流に河岸を残す。河岸は、外港オスティア（河口の意）まで続く。海外から輸送された物品は、外港オスティア（河口の意）で舳・筏など小舟に積み替えられる。小舟は河岸から牛が曳くなどして遡上し、河岸の尽きるローマの地で陸揚げされる。ローマは、古くから牛の市が立ち、内陸への塩の道（サラリア街道）の始点に当たる。海上輸送を経た河川交通と陸上交易とが結節する地点として、前 4 世紀にはラティウム地方を束ねた。その過程では、同質的な近隣都市と、場合によっては静かな統合が果たされたかもしれない。しかし、南イタリア（ギリシア系）や北方（エトルリア）との対峙は、軋轢を生んだ。

## 【古代②】（→次頁）

出典：Italy before the Marsic war. From Karl Julius Beloch: *Der italische Bund unter Roms Hegemonie*. Leipzig, 1880.

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Beloch\\_-\\_Italia\\_ante\\_bellum\\_Marsicum.png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Beloch_-_Italia_ante_bellum_Marsicum.png)



### 【古代③】

参照：フランチェスコ・ルクレーツィ（田中実＝佐々木健訳）「アントニウス・シルヴァヌスの遺言（Testamentum Antonii Silvani）」南山大学ヨーロッパ研究センター報 30号 1頁

[https://rci.nanzan-u.ac.jp/europe/en/journal/item/euro30\\_03\\_tanaka\\_minoru\\_sasaki\\_ken.pdf](https://rci.nanzan-u.ac.jp/europe/en/journal/item/euro30_03_tanaka_minoru_sasaki_ken.pdf)

### 【古代④】

参照：<https://auctions.cngcoins.com/lots/view/4-HR2BHC/anonymous-after-211-bc-ar-denarius-18mm-393-g-2h-unmarked-series-rome-mint-vf>

他に、<http://www.cngcoins.com>

### 【古代⑤】

参照：「《世界史の窓》半島統一戦争」

<https://www.y-history.net/appendix/wh0103-020.html>

## 【古代⑥】

### ファラオと皇帝崇拜

紀元前1世紀末に地中海世界を統一した大帝国ローマの出現は、「東方宗教」をもたらした。秘儀による入信を特徴とし、伝統的な共同体の宗教観とも共存する。また、ローマの地中海支配を決定づけたのは、クレオパトラを倒してエジプトを得たことであった。そのため、エジプトでファラオと呼ばれた王の祖先に位置するとされたイシス女神への信仰が、イタリアやローマでも強い影響力を持つに至った。後の皇帝崇拜はここに端を発すると見ることも出来よう。共和政後期から帝政前期にかけて、ローマにおける宗教弾圧（禁圧）がしばしば指摘される。しかし、イシス神にせよ酒神バックスにせよ、あるいは後のキリスト教にせよ、宗教であることを根拠に規制された訳ではない（オウム真理教事件を参照。規制された側の認識は別の問題である）。背景を問わず、民会を経ない団体は警戒される。ギリシャ・ローマ起源の従来型神殿が列柱廊で開放性・透明性を持つのに対し、エジプト起源のイシス神域は門で閉ざされ、地下のミトラス神殿は兵士を中心に後代には皇帝にも信仰が広がった。

## 【古代⑦】

参照：「album」水谷智洋編著『ラテン語図解辞典——古代ローマの文化と風俗』（研究社、2013年）8頁

<https://www.kenkyusha.co.jp/book/b10092096.html>

## 【古代⑧】（→次頁）

出典：ローマ帝国の最大版図（西暦117年、皇帝トラヤヌス）

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:RomanEmpire\\_117.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:RomanEmpire_117.svg)



## 【古代⑨】

### 信仰、皇帝崇拝とキリスト教

ユダヤ人は紀元前からローマに居住していた。キリスト教徒に改宗した者は、後1世紀半ばには教会を組織したようである。迷信に取りつかれたと見られ、刑事罰として処刑される例も知られる。ただ、礼拝や教会施設は禁止されていない。その後、キリスト教徒迫害と見られる軋轢・告発・処刑は確かにあった。ペテロ(初代ローマ教皇とされる)の墓地がヴァティカヌスの丘(現ヴァチカン)にあり巡礼地となる。ローマの教会ではラテン語使用が進み信徒は増した。他方で皇帝は将軍として平和をもたらすと崇敬の対象となる。身分や人種を問わず、人々は様々な神々で街を彩った。皇帝像が戦略的に大量生産され広場に設置される。「<sup>アラ・パキス</sup>平和の祭壇」には初代王ロムルス・アエネアス・女神ローマ等の浮彫がある。トラヤヌス記念柱・凱旋門などには戦勝が描かれた。私邸壁画や墓にもギリシア神話の主題が見られ、やがてキリスト教徒の石棺に彫刻や図像が登場した。

## 【古代⑩】

民法 533 条「双務契約の当事者の一方は、相手方がその債務の履行(債務の履行に代わる損害賠償の債務の履行を含む。)を提供するまでは、自己の債務の履行を拒むことができる。ただし、相手方の債務が弁済期にないときは、この限りでない。」  
(2026年5月26日時点)

## 【古代⑪】 (→次頁)

参照：Villa of the Mysteries in Pompeii seen from above

[https://en.wikipedia.org/wiki/Villa#/media/File:Villa\\_of\\_the\\_Mysteries\\_in\\_Pompeii.jpg](https://en.wikipedia.org/wiki/Villa#/media/File:Villa_of_the_Mysteries_in_Pompeii.jpg)



## 【古代⑫】

その後の展開（中世への胎動、いわゆる「古代末期」論）

### キリスト教の影響力

皇帝の親族にキリスト教徒が増え、寄進が盛んとなった。信仰が公認され、さらに国教とされ、影響力を増した。諸族にはアリウス派が多く、司教選出でカトリック教徒と対立する場面も生じた。5世紀末にゴート人がイタリアに建設した王国は、ビザンツ皇帝の認証に基づく。ローマ人貴族を重用し、教皇選定などローマ教会には介入しなかった。教皇は、東方で単性論が現れると、異端（アリウス派）のゴート王を東ローマ皇帝よりも頼った。しかし、以後、皇帝と教皇の関係により、イタリア王の地位が左右される三極構図が続く。また、フランク人の動向もこの三角形に楔となった。やがて6世紀以降、ランゴバルド王国とビザンツ領イタリアが半島のモザイクを決定づけた。ランゴバルド人はビザンツの軍官職を得て、公・侯・伯となる。以降は、王妃や公女との姻戚関係が正統性を担保した。7世紀には、法慣習がラテン語で『ロターリ王法典』として編纂される。都市を単位に公が統治と裁判を担い、イタリア王の肖像は帝国の貨幣に刻まれる。通婚は進んだが、都市は農村化し経済はブロック化した反面、修道院が開発と物流の拠点となった。王が教皇に寄進した土地は、やがて教皇領となる。8世紀にフランク王がランゴバルド王の娘を離縁した後、イタリア半島北部はカロリング朝の支配を受けたが、南部は独立を維持し、やがてノルマン人支配に組み込まれる。

カール(742~814)戴冠により王位は皇帝位と結びついたが、ビザンツ領イタリアでは司教が行政を担っていた。フランク王は、ローマ人の社会構造を維持しつつ、巡察使を活用した。9世紀には、各地からの干渉もあり、王位継承争いが生じる。支持を得ようと教会や都市司教に裁判権や防衛を委ねた。公証人の証書実務が法を支え、都市と農村の社会は安定を得た。これに先立ち6世紀にはローマ教皇が「神の代理人」としてキリスト教による統治体制を確立させていた。やがて元老院階層を保護する債務免除・猶予が定められるなどしたが、多くはコンスタンティノープルに移住する。混乱にあって教会は保護者として存在意義を高め、分裂した西方をまとめようと東ローマとの関係を模索した。ローマからビザンツ宮廷に特使が派遣され、教皇にはギリシア・シリア出身者が目立つ。しかし次第に、教皇とビザンツとの関係は希薄になった。教皇治世で年号が記載され、祈祷ではフランク王

の名が唱えられ、貨幣には皇帝肖像に代え教皇の名が刻まれた。

### アラブ人・ノルマン人

9世紀以降、アラブ勢力がイタリア半島の混沌を加速させた。半島にある幾つかの公(侯)国は、ランゴバルドの宗主権に服していたが、ビザンツやフランクの軍門に下り、11世紀にはノルマン人が侵入した。教皇権の影響も強い。皇帝や王は娘を相互に結婚させ、継承権争いが複雑化した。教皇は貴族が恣意的に入れ替えている。シチリアは9世紀にはアラブ人の手に落ちた。10世紀には東西ローマの仲立ちとしてビザンツ皇女がフランク人ローマ皇帝に降嫁する。こうして生まれたオットー三世(在位983~1002)は、従兄にあたるドイツ出身の教皇から戴冠された。他方でアラブ人の王朝は、ビザンツと和平協定を結ぶこともあったが、機に乗じてシチリア征服を進めた。シチリアには多様な人々が暮らしたが、多数はキリスト教徒である。奴隷ではイスラム改宗が目立ったが、キリスト教徒は税を支払い、ムスリムと共存した。アラブから農業や鉱業、刺繍などの技術が導入され、商業と産業が発達する。ノルマン人が支配する中でも、イスラムの法と信仰は維持された。

## 【古代⑬】

### 特例的手続

扶養請求では身分確定を待たず略式で判決が下された。東部では債務証書に基づく督促手続も発達する。軍人の訴訟は司令官が管轄するなど、例外が多く認められた。ユダヤ教徒は当事者の選任に基づき固有法に準拠した仲裁を用い、後に国家の制度として仲裁が準用された。